

養成医かわら版

NEWSLETTER



自己紹介

名前：市川裕太

勤務先：兵庫県立丹波医療センター

診療科：小児科

卒後：9年目

経歴：2017年に兵庫医科大学を卒業後、製鉄記念広畑病院(現 兵庫県立はりま姫路総合医療センター)、神戸大学医学部附属病院で初期研修を行い、小児科医に。公立豊岡病院で2年間前期派遣、兵庫県立丹波医療センターで1年間前期派遣を行った後、後期研修で2022年4月から神戸大学医学部附属病院小児科の腎臓グループに大学院生として所属し、2025年3月に博士号取得。現在は、兵庫県立丹波医療センターで後期派遣中。

2017年3月

兵庫医科大学卒業

2017年4月～2018年3月

製鉄記念広畑病院(初期研修医)

2018年4月～2019年3月

神戸大学医学部附属病院(初期研修医)

2019年4月～2021年3月

公立豊岡病院小児科

2021年4月～2022年3月

兵庫県立丹波医療センター小児科

2022年4月～2023年3月

神戸大学大学院医学研究科小児科学分野博士課程

2023年4月～2023年9月

兵庫県立こども病院腎臓内科(医長)

2023年10月～2025年3月

神戸大学大学院医学研究科小児科学分野博士課程

2024年4月～

兵庫県立丹波医療センター小児科(医長)

【医師(小児科医)を志したきっかけ】

現在、私は小児科医として働いていますが、小児科医を志したのは、小学生時の闘病がきっかけです。私は、小学3年生時にステロイド抵抗性ネフローゼ症候群と診断され神戸大学医学部附属病院小児科に入院しました。治療薬が効かず、末期腎不全になり、小学5年生で腹膜透析、小学6年生で母親をドナーとした腎臓移植手術を受けました。移植後にネフローゼが再発し、移植後リンパ球増殖症(PTLD)という死亡率が高い病気まで発症しましたが、当時担当医であった飯島一誠先生(現 兵庫県立こども病院院長)、野津寛大先生(現 神戸大学医学部附属病院小児科教授)がPTLDにリツキシマブが効いたという海外の論文を見つけ、当時未承認であったリツキシマブを投与する決断をしてくださり、PTLDは完治しました。また、驚いたことにネフローゼの再発まで寛解しました(その後、2014年にリツキシマブは難治性ネフローゼの治療薬として承認されました)。

入院中は本当に大変でしたが、自分は絵を描くことが好きだったので、その時間だけはつらいことを忘れられました。病院にいと病気のことばかり考えてしまいますが、つらいときこそ一瞬でも病気を忘れる時間が大切だと思うので、今病気で入院している子どもたちも、何か夢中になれるものを作ってほしいなと思っています。また、自分は研修医の先生とたわいもない話をする時間もとても好きでした。この時間も病気のことを忘れられました。そのような先生方と接する中で、「お医者さんっていい仕事だな。」と思うようになりました。また、「いつかこのつらさをよかったと思い返せるようになりたい。同じ病気で苦しむ子どもたちの気持ちをわかってあげられる医者になれば、自分が病気になった意味があるかもしれない。」と思うようになり、小児科医を目指しました。



【初期研修を振り返って：地域病院と大学病院】

初期研修では、学生時代から知っている地域卒の同期はもちろんですが、それ以外の同期も含めて、本当によい同期に恵まれたと思っています。初期研修1年目の製鉄記念広畑病院は3次救急の病院で、研修医が先頭に立って働く病院だったので、非常に多くの経験を積むことができました。しかしその反面、心身共に疲れる時もありましたが、よい同期に恵まれて乗り越えられたと思います(今でも1年目の同期たちとは仲良くやっています)。

初期研修2年目の神戸大学医学部附属病院でも本当によい同期に恵まれたと思っています。また、各科で専門的な疾患を学びながら、地域病院では紹介する側の立場であったところから、大学病院では紹介される側の立場にかわることを改めて実感し、臨床だけではなく発表や論文執筆、研究についても丁寧に指導していただき非常に勉強になりました。やはり自分は小児科に一番興味があり、小児科を専攻することにしました。



【前期派遣を振り返って：豊岡と丹波】

前期派遣では、まず公立豊岡病院小児科で2年間勤務させていただきました。豊岡病院小児科はNICUもあるため、駆け出しの小児科医として一般小児も新生児も両方を上司の下、しっかり基礎から学ばせていただきました。早期から自分の外来枠を持たせてもらい、ICや治療方針などを自分に委ねてもらえることも多く、これらの経験は今でも本当に生きています。丹波医療センター小児科の詳細は後述しますが、地域病院で小児科医として勤務した印象は、周りの医療従事者や患者さん、その家族たちが本当に優しく、自分を頼りにしてくれるということです。アットホームな関係性で頼ってもらいながら力をつけることができるのは、地域卒の特権であると思います。

夏は暑く、冬は寒い地域でしたが(当直明けに車が雪で埋まっていることもありましたが)、イベントが多く、ご飯は美味しく、家賃もやすくて自分にとっては私生活も含めて非常に楽しく過ごさせてもらいました。



【後期研修を振り返って：養成医と大学院】

前期派遣が終わった後、私は後期研修で神戸大学医学部附属病院小児科の腎臓グループに大学院生として所属しました。大学院を受験しようと思ったのは、やはり私がネフローゼ症候群であったこともあり、自分の担当医であった神大病院小児科の野津寛大教授の下、腎疾患の患者さんを多く診療したいということ、ネフローゼ症候群を含む腎疾患の病因などの研究に携わりたいということが大きかったと思います。野津先生や当時の医局長であった藤岡一路先生には、早期から養成医の制度に乗っ取りながら、大学院生として過ごすにはどうすればよいのかを考えていただきました。当初の予定通り、後期研修で大学院に入学して2年間で臨床と基礎研究をしっかり学び、その研究成果を持って後期派遣1年目に論文を完成させて博士号を取得する(早期卒業する)という結果が得られたのは、本当に神大病院小児科の先生方の指導のおかげだと思っています。

最近、養成医で大学院に入学する先生が少しずつ増えてきていると聞いています。もちろん大学院は絶対に入学しないといけないものではないですが、大学での臨床・研究に少しでも興味がある先生は、「自分は養成医だから・・・」と敬遠しないで、積極的に大学の各科の先輩方に相談して受験を考えて欲しいと思います。養成医でも意欲があれば十分に大学院生として学び、卒業することはできますし、自分は大学院で臨床にしても研究にしても腎疾患について深く学び、発表や論文執筆についてたくさん指導してもらった経験がその後の地域病院での後期派遣にもとても生きているので、養成医と大学院は相反するものではないということがもっと伝わっていけばよいと思っています。



【兵庫県立丹波医療センター小児科について】

現在、後期派遣で勤務している丹波医療センター小児科は、常勤の小児科医師5名で、週2-3回の外来業務+入院診療で地域の一次～二次医療を主な業務として担っています。病棟は一般(12床)、新生児室(4床)で構成されており、一般は感染症やアレルギー疾患(気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー)、熱性けいれん、川崎病などが主な対象疾患で新生児室は早産児や新生児一過性多呼吸などが主な対象疾患です。公立豊岡病院もそうでしたが、チームで垣根なく協力し合いながら、そしてアットホームな関係性で自分を頼ってもらいながら力をつけることができます。日々、暖かいスタッフと地域の人々に囲まれながら仕事をさせてもらっていると実感しています。また、指導も丁寧でしっかりしていますし、地域の症例が集約してくるので、症例・経験の質も高いです。地域病院で医師として働く経験は今後の医師人生に非常に役に立つと思いますので、地域枠で小児科を志す先生・学生は全く心配しないで丹波医療センター小児科にきてください。



【終わりに】

私は、腎移植後24年が過ぎ、現在も毎日免疫抑制剤の内服をして、定期的に外来受診もしていますが、元気に生活しています。妻と結婚して、息子も2人できました。地域はイベントも非常に多く、自然も豊かなので、息子と一緒にお祭りに参加したり、カブトムシを育てたり、ザリガニ釣りをしたり、小さい子供と暮らすには非常に良い環境であると感じながら日々過ごしています。

担当したあるネフローゼ患者さんのお母さんから「市川先生が医者かどうかは関係なくて、子どもの時に同じ病気だった人が大人になって元気に普通に生きている、その姿を見るだけで勇気が出ます。」と言ってもらったことがあります。自分も同じ病気でも頑張っている子どもたちを見るといつも勇気が出ます。これからも病気の子どもたちと勇気づけ合いながら、自分が家族とともに元気に楽しく生きていくということも目標にして頑張っていきたいと思います。

